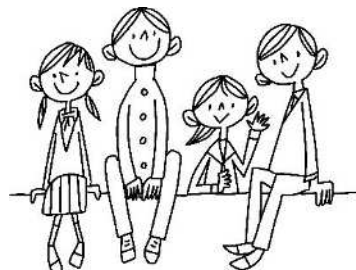


## 初期支援修了後の日本語・学習支援について

「きぼう」は6週間、「みらい」は10週間で修了すると、いよいよ在籍校での生活が始まります。各学校でそれぞれ引継ぎをしっかりとくださっていますが、在籍校で指導を進めていく上で困っているという声も聞きます。

今号は、「みらい」の初期支援を通じて見えてきた課題を共有し、課題を解消していくための支援について考えてみたいと思います。

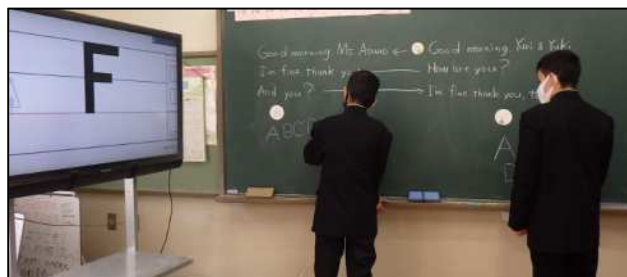


### 教科の指導(英語編)

「みらい」の生徒の大部分は、母語で英語の学習経験があると言います。しかし、その学び方や内容は、地域や学校によって、大きな差があると感じています。

フィリピン人生徒の中には、フィリピンで授業の多くを英語で学んで来ている生徒がいます。その一方で、英語を聞いたり話したりすることはできても、アルファベットの書き方や文法については、十分に学んで来ない生徒もいます。これは、滞日歴が長く日本語が話せるけれど、読み書きの力が弱い生徒の状況と非常に似ています。読んだり書いたりする力は、意図的・体系的に指導を受けなければ、習得できないことは、どの言語でも同じです。

ブラジル人生徒は、更に困り感の差が大きいと感じます。英語とポルトガル語は同じアルファベットを使いますが、「hアガー、jジョタ、qケー、xシス、yイプスロン」等、全く発音が異なる文字もあります。中には英語の「abc・・・」の発音ができない生徒もいて、英語の初めの一歩も学んでいないことがわかります。その一方で、「hospital」等、英語でもポルトガル語でも同じ綴りの単語も多く、英語を得意とする生徒もいます。



【↑アルファベットの書き方を確認している様子】



【↑教科書の本文を覚えて、  
役になりきって発表する様子】

「みらい」での英語学習は、こうした多様な学習背景を持つ生徒が、「日本の中学校における英語学習のスタイル」を学ぶ場となっています。みらいでは修了までに、1年生の教科書レベルの文法や単語を習得することを目標にしていますが、当然その到達度には個人差があります。

「みらい」修了後の中学校での英語の学習については、在籍学級でのアクティビティ重視の授業では、どの生徒も活躍の場があると思います。「みらい」でも、たくさんのアクティビティをして経験をさせています。自信がないという生徒にも、声をかけて励ましていただくと意欲的に取り組めるようになると思います。読み書きが著しくできない生徒に

は、取り出し指導での支援があると良いと思います。その場合、日本語初期と英語初期は、生活語彙や基本文型は共通する部分も多いので、英文和訳、和文英訳など双方向で学習することも可能です。

## 在籍学級でできる工夫

「みらい」では、言語の負担が少ない学習や、母国で既習の学習内容であれば、国際教室だけでなく、母学級での授業でも対応できるようにしたいと考えています。しかし、日本語である程度のコミュニケーションがとれても、教科として見方・考え方や未習の概念を理解していくことは、ハードルが高くなります。ここでは、教科としての活動と日本語の力を高める活動が両立するための支援や配慮を考えてみたいと思います。



【↑】豊岡中学校の掲示。

委員会活動でブラジルの紹介をしています

### (1) 在籍学級で生徒ができる支援

在籍学級で、教材のルビ振りができるような環境があると、大変ありがたいです。例えば、学級におけるピアサポート的な係として、交代制で定期的に教材にルビをふる仕組みがあると助かります。話す力は、生徒同士の関わり合いで伸びることも多いにありますが、学習面で関わり合える場を増やしていくことはお互いに得られるものが大きいです。

支援する生徒は、共生社会において、インクルーシブ的な視点を自然と身につけることができますし、外国人生徒は自ら聞いて主体的に学ぼうとする姿勢が育まれると思います。どの生徒も在籍学級で過ごしやすい手だての一つになれば幸いです。

### (2) 授業者ができる配慮

母学級で外国人生徒を支援するとき、授業の進度や教材の準備を考慮しながら行うことになるので、授業者の過負担にならずにできる支援や生徒自らが行う工夫をご紹介します。

まず、板書でルビをふっていただく配慮があるとありがたいです。もちろん、板書すべてにルビをふらなくても、重要な語彙だけでも十分です。ルビがあるだけで、子どもは自分で調べることができるようになります。また、板書を写す際にすべてをノートに書ききれないことが多いので、写すべき箇所を色分けて囲むだけでも助かります。



【↑】「みらい」の理科の授業。板書にルビをつけています。

【↓】生徒の自主勉ノート。母語で用語を調べています。

また、合意的配慮のもとで、生徒自身ができることは、タブレットの写真機能を使って板書の記録をとることが考えられます。今のタブレットの機能には、板書の写真から母語に翻訳ができる機能もついていますので、ここから自分で読み取り、学習を進めていくことでできると思います。

ICT は、日本語指導が必要な児童生徒の学習を支えるツールになると期待されています。「みらい」でも有効な活用方法を考え、実践し、発信していきたいと思っています。



令和3年度も大変お世話になり、ありがとうございました。コロナ対策が進む中、外国人受け入れの緩和のニュースも聞こえてきます。来年度はどのような年になるのでしょうか？

いずれにしても、初期支援コース「きぼう」「みらい」での実践を重ね、子どもたちの明るい未来に貢献したいと考えています。来年度もどうぞよろしくお願い致します。 ♪初期支援コーススタッフ一同♪